

---

# 睡蓮の糸

日室千種

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

睡蓮の糸

### 【Nコード】

N7768N

### 【作者名】

日室千種

### 【あらすじ】

流れの薬師として各地を巡っていたターナハースは、かつて水の国と謳われた、今は亡きウィハーシュ王国の懐かしい森で、隣国ジークフランド国の王太子一行と遭遇した。一行の中に忌まわしい記憶につながる青年を見て驚愕し、さらに王太子に胸に咲く睡蓮の痣を見られてしまい、王都に連れ帰ると宣言されるが、。。。

神が人と縊り合う時代の、火の国の王子と水の国の巫女の伝説。

## 1 出会い

激しい雨になった。

飛礫のように打ちつけられ、森が萎縮している。

「水神が、お怒りかな」

ターナハースは、ふと呟いた己を嘲るかのように、唇を歪めた。はるか高みで抱きしめ合うように空を覆う樹冠のおかげで、雨粒に直接叩かれずには済んでいるが、すでに髪も服も荷物の中身まですっかり濡れている。枝葉が支えきれずに落ちてくる水滴は細い滝のようで、さらに足もと、普段から湿った細い道が今や泥流となっている。

「まいったな」

ぼやくのは、こんなところまで踏み込んでしまった自分に対してだったが、それでもターナハースは慎重に足場を探って前へと進んだ。

目的地はもうすぐ。目前の大木をぐるりと回り込んだところだ。地上に張り出している根を足がかりにして、泥に足を取られないよう、そろりと足を前に滑らせる。ひび割れた樹肌に指をかけ、杖の代わりにしてきた木の枝をぐずぐずと頼りない地面に深く突き刺し、大木に張り付いて、次の足を出す。

そうして、膝ほどの高さの段差を超えると、ぱっと視界が開けた。

民家が5、6軒ほどの、ほんの小さな村ならすっぽりと入りそうな広さの野原だ。

背の高い木はない。かわりに、野原の真ん中に木造の古い小屋がある。

水捌けのいい土が上層にあるため、野原はわずかにぬかるんでいるだけだ。一面草が茂っているが、この強い雨でほとんどが折られたように横倒しになり、災難の終わるのを待っているよう。

足早に小屋に近づけば、小屋の周囲の踏み固められた土が、草を寄せ付けずにむき出しになっていた。

人が住んでいた、気配。

だが閉じたままの鎧戸の棧や壁板のくぼみにたまった埃は湿気に泥となっていたし、縁の下には埃を被って灰色になった蜘蛛の巣が、いかにもみずばらしく幾重にも垂れていた。

小屋の材が腐りもせず、揺らぎもしていないのは、膝ほどの高さまで上げられた床と、柱の下にかまされた平たい石のためだろう。

小屋は明らかに人の手を離れ、ゆるやかに朽ちていこうとしていた。

「十年間、放りっぱなしだものね」

ターナハースはしみじみと零した。もつとも、あまりに激しい雨音に、自分でも何も聞き取れなかったが。

ひとつ息をついて、小屋の扉へ向かう代わりに裏側に回った。

黄色い花をつけた背の高い草が互いに寄りかかり合っているのを、まとめて根元から踏み折ると、その向こうに腰ほどの高さの石柱が現れた。横手には船舵のような環状の取っ手がついている。

荷物を背負い直して、おもむろに力一杯ひねれば、案外すんなりと取っ手は回り、石柱の頂に埋め込まれた木の筒から勢いよく清水が流れ出した。

泥まみれの手を流して、ターナハースはふと、辺りを見回した。

雨のせいで白く煙った風景はひどく静かで、苦笑を誘う。

「誰も、いるわけじゃないじゃない」

ことさらに呟いて、着ているものを脱ぎ始めた。外套、帯、表着、下着、靴まで。結わえていた黒髪もばらばらと解いてしまった。

梢から降ってきた泥が髪の間から転がり落ち、雨に溶けて肌を汚していく。

かがみ込んで頭に直接水をかぶり、ざぶざぶと無造作に髪を洗い、体の泥をざつと流し終わると、服を洗い、ついでに荷袋の外側も洗

い流した。外套以外の洗い物を荷袋に一緒くたに詰め込むころには、さすがに冷えて、ぶるりと震えが来た。

「まだ、夏は遠いか」

仕上げて体をひと流しして、外套を羽織った。

重たくなった荷袋を抱え込むと、急いで小屋の入り口に向かう。

走ると、外套が翻って白い肌が見える。雨は強すぎて、肌にあたる度に痛みを伴った。

戸口前の階を上がって、ターナハースは肌寒さに外套をかき合わせた。それでも、膝下までしかない外套は足下の冷たさを退散させてはくれない。

（火をおこそう）

そう決めて、逸って扉を開ける。

ぎくり、とターナハースは立ちすくんだ。

誰も知るはずのない小屋。誰も立ち入らない森の奥の小屋。

その小屋の中に、見知らぬ男たちがいた。

雨の音が、激しい、激しい。

彼らが互いに何かを言ったが、何も聞こえなかった。耳に蓋をされたようでもどかしかったが、おかげでターナハースは落ち着くことができた。

男たちは、大半が半腰になって身構えていた。その構えも、身なりも、彼らが決して賊の類いではないことを示している。

六人。皆、若い。最年長と見える、最奥に悠然と座る男でも、二十七、八か。

その男が、どうやら他の者の主人らしかった。真っ直ぐにこちらを見る目には、尋常でない力がある。どこかの貴族の子弟、というよりは、為政者のお忍びといったところか。

??それなら。お忍びで旅をする貴族が、何も知らずに森に入っ  
て迷ったということなら。

（有り得る、でしょうね）

そう、納得しようとした時だった。

「この森に、地元の者は立ち入らないはずだ。何者だ、娘」  
雨に負けない、つよい声が響いた。

思わず、最奥の男から視線を外して、声を見た。

声の主は、青年。少年に近い、十七、八の男。

六人の中で独り、黒い髪と黒い目をして、旧ウィハーシユ国の出身であることがわかった。真っ直ぐな双眸、通った鼻筋、若者らしい頬。見れば見るほど、美しい青年だ。

しかしターナハースが青年に釘付けになったのは、見目の良さゆえではなかった。

（誰かに、似てる）

そう、目元を優しくし、唇と頬に肉をつけただけで。

悲鳴を上げることができないほど、ターナハースは衝撃を受けた。自分が青ざめているのがわかる。首の後ろにぬるりと汗が湧いた。さらに、声が重ねられた。

「名を言え、娘。どこの者だ」

不審に思われると思っても抑えられず、拳は握りしめられ、膝は頼りなく震えだした。体が重く、感覚も遠くなる。

心だけが、繰り返し叫んでいた。

（なぜ、なぜ十年も経ってから会ったの？）

どんなに足掻いても、こころの奥底に淀む忌まわしい記憶。

ターナハースは、強く目をつぶった。

（???いまさら会いたくなんて、なかった!!）

## 2 過去の夢

ハスランの屋敷が燃えていた。

激しい雨も、すべて蒸発させる勢いで。

お気に入りだった黒檀の椅子、庭の椿も眩しい炎の中だった。

（助けて。助けて）

叫び声に応える者はいないのか、と見回すと、いつの間にか周囲は人で埋まっていた。

黒い髪、黒い目。神事に臨むような、白い服、服、服……。その面は、どれも一様に暗く、怨みに満ちていた。

（助けて。父上を、ウクリナを。私の、小さな弟を）

『火は、忌むべきもの』

ひとりが言った。そしてまたひとりが言う。

『水の国ウィハーシュにては、汚れたるもの』  
さらにひとりが言う。

『水の都ハスランに、不要のもの』

あるいはこれは、白い怨みの民すべての声か。

『お前は、不浄の者』

冷たい針で、胸の深いところをひと突きにされた気がした。

見れば、いつの間にか自分は清い白布を纏い、手には懐剣を握っている。

『神の愛し子よ』

『裁きを』

（いや……いやっ。ちちうええ）

ガラガラと、炎の向こうで屋敷は砂のように崩れ落ちた。中に、

三人の家族を抱えたまま。

?? いや、音を立てたものは、足元にあった。

三体の、骸。長い時に晒されたかのように、まっさらに白い、抜け殻たち。

二つは大人の、一つは子供の。

へたり、と座り込んで、小さなそれを取った。まろやかな形の頭蓋骨。向き合うように捧げ持って、まじまじと見つめずにはいられなかった。

その幼い額の中央に、小さな縦長の線があった。線、いや、穴だ。懐剣が、骨まで穿った、その跡だ。

はっとした瞬間に、手の中の重さが変化した。空虚な骨の重さから、血肉を備えた生首の重さに。

きれいな顔の少年だった。優しく伏せられたまぶたに、ふっくらとした頬。ほんのりと色づく小さな唇は、まるで生きているようなのに。

なのに、なぜ。

なぜ、額に無骨な懐剣が突き立っているのか。

なぜ、首の切り口から血が流れるのか。

姉さん。

声が聞こえて、我に返る。

いつの間にか、首は消えていた。何もかもが、闇と化していた。寒さ。

それはかつての雨の湖のように、骨から体を冷やしてくる。

(嫌)

叫びは、虚しい。

(嫌。嫌だ)

ターナハースは、身を擦って絶叫した。



ぼっかりと目が覚めた。

見慣れない古びた天井。涙と汗で濡れたベッド。

これこそ、普段通りの朝だった。

心が凍えるような悪夢とも、これで十年の付き合いだ。随分前に、悲鳴を上げずに目覚めることができるようになった。涙や汗の量も、かつてとは比べ物にならないくらい少なくなった。

ウィハーシュを離れている間はさらに楽になるのだが、一年に一度、雨季の只中にウィハーシュの旧王都ハスランを訪れるのは習性のようになっていた。

体の火照りが取れるのを待ち、薄暗い部屋のカーテンを少し持ち上げると、外はやはり雨だった。

雨季には、ハスランは雨に降り固められる。昔はこれを歓水の月と呼び、祭りを行っていたが、祭司であつた水の王家が潰えてからはただの気鬱な雨でしかない。

火の王国とも呼ばれる隣国ジークフアランドの属領となり十年。町並みとともに、人々の心も移ろいつつある。

（ここはすでに故郷ではないのかも）

ハスランを訪れても、知己を訪れることもなく、宿場に籠って雨を眺め、外出は常に雨に紛れるようにひっそりと。何のためにここにいるのかといつも自問し、毎回、答えを濃い霧の向こうに置いたまま、再びここに背を向けてきた。

今回も、そうなりそうだった。

（もう、今日帰ろう）

帰る先が別にあることも、自然になった。もつともそれも、長くて半年の住処ではあるが。先年の冬の初めから住み着いた村では、出産を控えた女が待っている。今回はあまりゆっくりしてられない。

ターナハースはすっかり冷えた素肌に旅の衣を纏って、宿を引き払った。

ハスランの観光と言えば、旧王城や縦横に水路が走る古い街並みだ。少し足を伸ばせば、神の湖と呼ばれる景勝の地もある。

だがターナハースが目指したのは、街の外れの、草木が生い茂った寂しい土地だった。

十年前は、打捨てられた場所だった。水の国の民ならば、誰もが顔を顰め、鼻を鳴らして蔑んだ、汚れた土地だった。

時が経ち、見通しの良かった広い敷地一帯と隔てなく、周辺の道路にも荒れ地と同じ草が丈高く伸び、根を張った灌木が石畳を崩し、地形を変えた。かつての忌むべき土地が、正確にどこから始まるのか、わかる者はいないかもしれない。人々は日々の暮らしに追われて、失われた一家への憎しみを鮮やかに持ち続けることには早々に飽きたらしい。今はただ、敷地の奥の深い森からひとまとめにして、近寄るべきでないところとして、見捨てられているだけだ。

どちらが辛いことなのかと、ターナハースはふと思うことがある。答えは、あるはずもないが。

街中を通って直接土地に入るのは、やはりためらわれた。一度街から出るようにして、ぐるりと横手に回り込み、おぼろげな感覚を頼りに木々の間に踏み込んだ。

前回より苦勞して、ほかより木の低い、開けた場所に出た。

一年経つと、森の景色はひどく変わってしまった。以前はなかったと思われる、丸くて先の尖った手のひらサイズの葉をつけた若い木が、開けた場所を席卷しつつあった。その根元にわずかに見える石床の名残から、ここが目的の場所に近いと、なんとか知ることができた。

目を上げて、より背の高い木を探して見回し、いくつかの候補に近寄って調べると、三本目で、幹に刻まれた印を見つけることがで

きた。その幹に背を沿わせ、手の中の磁石で方位を確認しつつ北へ数歩。

群青のタイルが敷かれた一角の手前で、ターナハースは立ち尽くした。

タイルはすっかりすり減って、色味を失っている。それが群青色だとわかるのは、記憶の中の色をのせているからかもしれない。

防水の外套のフードをのけて、膝をついたら、すぐにあちこちから水が染み入ってきた。外套も、裏から濡れてしまえば、防水の効果はなくなってくる。

だが、ターナハースは構わなかった。

用意してきた水を、タイルに流す。すでに雨を湛えていた凹んだ表面で、水が跳ねた。

「ごめんなさい」

いつも、謝ってしまう。

もう心の中はからからに乾いていて、日中は思い出すことも稀なのに、夢ではいつも泣いている。

何かを、赦しを、求めているのだろうか。

だとしたら、与えられることのないことは、わかっている。

だけど、求めずにはいられないのかもしれない。

これは自己満足だと、膝について詫びることで一時自分の心を慰めているだけだと、冷静な声がする。

「もう、来るのをやめた方がいいかな」

もう、もう、と、この数年、同じことを言っている気がするけれど。

飽きもせず落ちてくる天の水が顔に滴るのを袖で拭い、ふと、視界の端に赤く光るものを見た。

小指の爪ほどの紅玉をあしらったカフスだった。草の上で、雨を弾いてきらめいていた。

拾い上げると、下敷きになっていた草が息をつくように立ち上が

った。

ごく最近、おそらく今日のうちの落とし物らしい。

しかし、これは並大抵の品ではない。

紅玉の色の深みと透明度は、ハスランで一番の宝石店に行っても滅多に見られないだろう。嵌め込みの奥には、火炎の獅子の紋章が入っている。それがジークフアランド国の王家の紋だということは、この大陸の者なら誰でも知っていることだ。

そんなものが、なぜこの場所に。

瞬間胸をよぎった感情に、ターナハースは驚いた。

ジークフアランド王家ゆかりの人間が、この場所を訪れた。

推測されるその事実が、自分の心をわずかにでも浮き立たせるとは、予想できなかったのだ。

この場所がこんな土地になった根本の原因はジークフアランド国にある。失われた一家にとって、最も憎い相手のはずだ。だから、かつては激しく憎んでいた。

昔のターナハースであったなら、なにを今さらのこのこと、復讐をされにでも来たのかと、我を忘れて探し歩いていたかもしれないのに、かすかに喜びのような感情の細波が消えた後、ターナハースの心は不思議なほど凧いでいた。

(……私以外に、唯一、この場所を見にきた人かも)

感傷に過ぎないとわかっている。何のために来たのかは気になるが、持ち主に会おうとまでは思わない。

水の国の皆がこの場所を忘れようとしているように、自分も憎しみを忘れようとしているのだらうと、ぼんやり思った。

そう認識して、ターナハースはひどく安堵した。

憎むのはとても疲れる。

もし出会えば、せつかく古びた憎しみが、再燃しないとも限らない。

もう、関わりたくない。  
ただ。

（いい国に、なってくれればいいと思う）

ターナハースはカフスを草の床にそつと戻した。

「うん。本当に最後にしよう」

静かに立ち上がって、ひとり呟き、最後の最後に、ずっと気になりながら行くことのできなかった場所を訪れて永遠の見納めにしよう、きびすを返した。

意外な遭遇を、予想だにせず。

### 3 花の痣

握り合わせた外套の隙間から、どんどん体が冷えていく。

緊張とは別に、ターナハースの唇は細かく震え始めていた。

「やましくなければ怯える必要などない。名乗れ」

閉じた目をこじ開けようという気迫の声に、やむなく応じるしかなかった。

男の一人がターナハースと扉の間に剣の鞘を差し込み、退路を塞いでいる。外套の下は素裸の状態で、剣を扱うことに慣れた男をかくぐつて逃げ出す自信はなかった。

渋々、視線を上げれば、端正な青年が睨みつけてきていた。十分に恐ろしい眼差し。

だが、幼い頃の拗ねて怒った顔が記憶から飛び出してきて、あまり変わっていないな、と頭の片隅で考えた。緊張が過ぎたせいで、思考が一瞬逃避したのかもしれない。

その逃避のおかげで、唇の端をわずかに上げ、ぎこちないながらも笑いを浮かべ、なんとか声を出すことができた。

「タ、ターナハース。エセルナの村から、の旅行者です」

「……旅行者が、なぜこんな外れに来るのだ」

「昔、この都に住んで、ました。旅行でよく来て、あちこち歩いてるんです。きよ、今日は道にまよつて……」

寒さに歯の根も合わなくなつて、うまく言葉が出ない。

つつかえつつかえ、ゆつくりとしゃべる間、男たちの視線に晒されるむき出しの素足がひどく気になった。

「あ、あの、ごめ、さい。出ます。私、帰ります」

弱々しく震えながら言つたから、とても怯えた様子に見えたのだろう。青年の顔から怒気が薄らいだ。

「悪いが、そうしてくれ。ここは、満員だ」

明らかに寒さに震えている女に対して無情な言葉ではあったが、

この異様な状態の小屋から出られるなら、有り難いことだった。

雨は激しく小屋を叩き、不安を煽る。男ばかりの中で、この格好でいつまでもいるものではない。

「は、い。すみません。し、つれいします」

そそくさと、という印象を与えないよう、慎重に踵を返す。扉の前の男は、やや気の毒そうな、人の良い顔をのぞかせて道を譲ってくれた。

なのに。

「哀れではないか、セイラン。震えてる女を追い出すこともない」  
哀れ、の意味を知っているのかと疑うほど、冷えた声だった。そして、追い出すことはない、すなわち、出すな、という指示を明確につきつける声だった。

扉は瞬時に再び抑えられた。思わず見上げた顔からは、表情は一切消えていた。

（まづい、かも？）

セイランと呼ばれた青年と対峙した時より冷たい汗が、こめかみに浮いた。

「我はジークファランド国王太子、リファラジーク。娘、ここに来て、暖をとれ」

固まっていたターナハースは、背後から斬りつけられたように振り返った。

狭い小屋の中。

炉の向こう、一番遠いところから、男がこちらを見ていた。

浅黒い肌に引き締まった顔立ち。セイランにまだ稚気が残って線が細いの堪比べ、男は勁く、大きい。

齢二十七にして、ジークファランド国の実を伴った大將軍であり、有能な政治家でもある。民からの愛されぶりは熱烈で、王太子らしからず未だ独り身で気促に浮き名を流していることなど、茶目つ気としか捉えられない。

近年は旧ウィハーシュの民にですら、王太子は人気があった。他

の貴族と違い、王太子は旧ウィハーシュの民を差別しない、と。

しかし今、男の目はひどく冷たかった。

憎まれている、と錯覚しそうなほどだった。

（旧ウィハーシュの民をも、平等に愛してくださる世継ぎの君？

冗談！）

先に王太子と名乗ったのは、名乗ってしまえば逆らうことができないのを、十分承知の上だろう。身分をひけらかせて人を動かすやり方は、貴族にとっては全くタブーではない。それは時には、不要な軋轢を避けるための、マナーとなることすらある。

だが、王太子ともあるう者が、無力な一人の娘に対してすることではないだろう、とターナハースは表情を曇らせた。

（これが、次の王）

胸に押し寄せたものがあまりに多く、しばらく突っ立ってしまった。

「行った方がいい」

小さな声で囁いて背を押してきたのは、扉を封じた男だった。

我に返れば、炉の右手の男たちは小屋の壁に張り付くように後退し、大きな体を縮めて、王太子の元までの道を空けていた。視線は向けてこないが、誰もがターナハースの動きに注意を払っている。何十もの蜘蛛の巣に絡めとられた蝶のように、諦めることしか許されないようだ。

口を引き結び、外套を合わせる手を強く握りしめると、そろそろと王太子へ近づいた。

滴る水が床を濡らし、乾いた板間に小さな染みがいくつもついた。古い床が、一步ごとに軋む。炉のそばに来て、木の焼ける匂いを嗅ぎ、左の素足がじんわり暖かくなった。

こんな状況に関わらず、温もりにほっとした。

暖まるのはここでもいいのでは、と思ったのがわかったのか、タ



ーナハースの歩みが止まる前に、リファラジークが手を差し伸べてきた。

まるで貴婦人の手を押し頂くように。実際は、最後の圧力だった。躊躇った末に、王太子にもう一步近づき、外套から手首だけを出して指先だけを触れ合わせた。

どんなに気をつけても、合わせが緩むので肌が見えてしまうはずだった。リファラジークの反対隣に座っているセイランが気になった。しかし、セイランも他の男たちも、大人しく座してこちらには視線を向けてこない。

有り難いようではあったが、彼らは主の所業を咎めるつもりはないらしいので、助けにもなり得なかった。

「雨の日は、服を着ないのか」

指が触れた瞬間手を取られ、隣に座らされるなり、そう問われた。あまりに無神経な言いざまに血が上り、冷えきっていた頬がぴりぴりした。

「井戸を、見つけたので、泥だらけの服を、洗ってしまったのです」正直に答えると、不意に腕を引かれて男の膝に倒れ込んだ。

ずぶ濡れの自分を抱き寄せるなど、予想もできず、呆氣にとられてしまう。

その隙に、無遠慮に外套の内側に入ってきた手が、さっと柔らかなところを撫でた。

ふうつと、王太子の服に薰き染めた香が匂った。日向の空気の匂いも一緒に、さっと顔をかすめて立ち上っていった。

一瞬遅れて、自分の身に起こったことに気がついた。

冷たく肌に触れていた外套が、暖かく頼もしく体を包んでいた。額から首筋に絡み付いて不快だった髪も、はらはらと頬をくすぐっていた。荷袋も水の重みを失い、晴れた日に干したように軽く、柔らかくなっていた。

さらに触れられたところから、じんわりと体の芯が温もっていく。  
(これは、まさか)

ターナハースは、呆然と王太子を見上げた。

王太子は、変わらず冷たい目を合わせてきたが、ふと片頬を上げた。

「火の業を見るのは初めてか。……不思議な目の色。生粋のウィハ―シユの民ではないな」

ジークフアランドの王家は、代々火を操ることに長けている。かつては王一人の業で戦を勝利に導いたほどに、激しい能力と聞く。だが、それをこんなところで用いるとは。

呆れ混じりの驚きを浮かべるターナハースの目は、淡くきらめく湖の色をしている。それが、リファラジークの赤みの強い茶色の瞳と至近距離でぶつかった。

変わらず、冷えた目。だが男の腕は腰にまわされたままだ。

そんな状況ではないにも関わらず、ふと、はだけた前合わせから肌が見えそうな角度にセイランが座っていることに思い至ったが、興味なさそうに小枝を折っているのを視界の隅で認めて、ほっとした。

「セイランを気にしているのか」

視線は、動かさなかったはずだ。なのに面白そうに言われて、ぎくりと体が強張った。腕を突っ張って体を離そうとしたが、易々と捕らえられて抱え込まれた。

セイランは、一度もこちらを見ない。

男の手が、無遠慮に胸を掴んだ。

それでもターナハースは、悲鳴をかみ殺し、じっと茶色の瞳を見つめた。

見返してくる男の目には、わずかにも熱はなく、決して女の肌を性急に求める様子には見えない。だから、これは気紛れな、一時の悪戯でしかないのだろう。そう判断したターナハースは、ただ耐えてやり過ごすのが一番上策だとふんだのだ。

いたぶるように動く手指にも、口を引き結んだまま、固まった体を動かさなかった。その様子に、茶色い瞳が細められる。手は、突

然に肌から離れた。

ふ、と思わず小さな息が抜けた。小屋中で同時に緊張が緩んだように感じたのは、ターナハースの気のせいだったかどうか。

自分で体勢を整える前に、両の二の腕を掴まれ起こされた。

赤茶の視線が外され、そのまま放された。の、だが。

「……花、か？」

小さな呟きを聞いたときには、遅かった。

リファラジークの視線は、安堵に気が緩んだターナハースが隠し損ねた白い胸にひたりと向けられていた。正確には、火の業に当てられほんのりと上気した二つの膨らみの、間。

気がついたターナハースが男の目から逃れようとしたが、すでに肩を押さえ込まれ、指先すら動かせなくなっていた。

大理石のような肌に、明瞭な輪郭線をもった朱色の痣が浮き出ている。外套に隠れた脇腹の辺りからすっと伸びる線は、古い傷のようにも見える。だがその先端、ちょうど心臓の位置に、長端の尖った楕円形の痣がいくつか寄り合っているのが、まるで水面からすくと立ち咲く睡蓮の花のようだった。

一見すると入れ墨のようだったが、初めにちらりと見えた肌には影すらなかった。そのことが、男の気を引いたらしかった。

ターナハースは、自分の迂闊さに目眩がした。

迂闊すぎた。

花が見えるほど肌を見せてしまったこと。まして、浮き出る前後を目撃されるなんて。

花が浮き出たのに即座に気づけなかったこと。いや、まさかこの緊張した状況で出るとはまったく予想できなかったけれど。

何が悪かったのだろう、と今考えても仕方ないことを考えかけて、自分が混乱していることに気がついた。

「やめてください。もう許して……」

懇願し、拒絶するが、男は胸の花から意識を離せないようだった。花は、ターナハースの怯えに応じるように、するすると輪郭を失い、白い肌の奥へと消えていこうとする。それに引き寄せられるように、男はそつと花に口づけた。

「いやっ」

押さえ込まれ、はだけられた体に直接男の唇を感じて、ついに悲鳴が洩れた。

何より恐ろしかったのは、男の目が突然変わったことだ。胸の花に魅入られたのか、冷えきっていた眼差しが、強い興味と明らかな欲望に、熱く潤んだように見えた。それが、たまらなく恐ろしかった。ぞつと、体が冷えた。

為すすべもなく消えてしまった花に、リファラジークは舌打ちをすると、その舌で肌を舐め上げた。

声にならない叫びがターナハースの喉からひゅつと洩れた。

恐怖に冷えきったはずの体が、揺り起こされそうだった。舐められたところが、焼けそくに熱い。

このままでは、逃げられなくなる。

「殿下、それまで」

厳しい声で制止してきたのは、炉を囲んでいた男の一人だ。

今や、見ぬ振りをしていた男たちも、全員が主君の悪戯に眉をかめていた。セイランも、いくらか苦い顔でこちらを向いていた。

ターナハースは思わず目をつぶった。

「らしくないですよ、殿下。無理強いはご趣味ではないでしょう」わざとらしくいだけた物言いで諫められ、胸の間に顔を埋めたまま、リファラジークがふう、と息をつくのを感じた。だが気配が離れ、外套の合わせをいささか乱暴に閉じられても、頭ががんと鳴るようで目が開けられず、強張ったままだった。

助けてくれた男には感謝はするが腹も立った。悲鳴を上げて抗っ

たから無理強い、逆らうこともできず諦めるなら無体を強いてもいいと思っっているのだろうか。

ばかげてる。これだから男は、とひとしきり文句を並べたら、ようやく余分な力が抜けてきた。

男の手は、まだターナハースを捕らえたままだった。

もう少し抗って解放されるだろうか。そつと目を開けると、再び温度を失った男の目が、視線を絡めとってにっと笑った。

「ターナハースといったな。このまま、ジークフアランドの都まで連れて行く」

「何を……」

思わず周囲を見るが、そこには異様な沈黙があるのみで、誰もまともに反応していなかった。

彼らも自分に劣らず驚いていることに、ターナハースはわずかに期待した。抗えば、支持してはくれまいか、と。

「い、いやです。困ります。村には出産を控えて私を待っている者もいます」

「エセルナといったな。事情を話せ」

「私は医師をかじっているということで医師を兼ねた薬師として村に囑されています。産み月近い初産の娘がいますが、胎児が……危険な状態で産まれてくる可能性が高いのです」

「セイラン」

リファラジークは話に動じることなく、傍らではつきりと厳しい顔をしている青年を呼んだ。

「エセルナの村に腕の確かな女医師を三人送れ。望まれれば一人を常駐させろ。……ターナハース。村から回収するものはあるか」

「……は？」

呆然と呟いたきり返答できない様子に、リファラジークはそう長くは待たなかった。

「まあいい。何でも新しく与える。身一つでついて来い」

セイランは、呆れ果てた表情は隠しもせず、ただ黙って了承の礼

をとった。他の男たちも似たり寄ったりで。ターナハースごと立ち上がった主君に、もの言いたげな視線を投げつつも、皆が一斉に従った。

炉の火がすうつと消え去り、それを気にすることもなく男たちがどかどかと小屋を出て行く。

リファラジークはようやくターナハースを手放し、異論があるとは少しも思っていない様子で出口へ向かった。その背中を見て、ようやく事の次第に頭が追いついた。

「リファラジーク殿下。困ります。これでは、あんまりです」

小屋の中から男たちがいなくなつて、精神的な圧迫感が薄れた。ゆえに、ターナハースはなんとか食い下がりがりたくなった。

リファラジークは面白そうな目で顔だけ振り向き、強張った白い頬に無造作に触れてきた。

「ジークと呼べ。殿下はいらん。……帰りたいか、エセルナに。男が待っているのか」

「そんな。故郷ではありませんが、責任があります。帰らなければ」  
言い募ると、ぶわつと熱い風が顔を撫でて髪を舞い上がらせた。覚えのある、日向の匂い。

「すべて無くしては帰れまい。逃げるほど、追いつめたくなる。程々が身のためだ」

冷たい笑み。

はつと見下ろせば、手にしていたはずの荷が、無くなっていた。中にいれてあったベルトも靴も貨幣すら、すべて跡形もなく燃やされたのだと悟る。炭も、灰すらもない。

さらに自分が何も身に纏っていないことに愕然となった。着ていた外套まで、肌には傷を付けること無く一瞬で燃やされたのだ。荷を失って空いた手で慌てて体を隠そうとしたターナハースは、リファラジークの外套の下に抱き込まれた。軽々と横抱きにされ、体を隠された。

「今は、どこにも花はないな。何をすれば見える？」

ターナハースの全身を見たのだろう。不躰な言い様も相まって羞恥がかき立てられたが、ターナハースは懸命に気持ちを抑えた。問いには口を引き結んだが、リファラジークは答えがないことにも愉快げだった。

「いずれ、わかる。探る方が面白そうだ」  
体を支える手が、熱い。

ターナハースは目前が暗くなるのを感じた。

#### 4 火の国 王城（1）

リファラジークと共にいれば、雨に濡れることはなかった。

激しい雨も、すべて肌にとどり着く前に蒸発していく。

白い靄をまとった一団は小屋の裏手に回り、草もない踏み固められた土の上で立ち止まった。強い雨が土をえぐり、茶色く泡立っていた水溜まりも、踏み込まれればしゅるしゅると干上がってしまった。

これほど常に火の業を使い続ける力は、伝説で語られる神人に匹敵するのではないか。神が人の姿をとった種族とされた神人は、古の歴史から徐々に姿を消した。それは人と交わったためだという説があり、例えば火の業を使うジークフランド王家は神人の力を強く受け継いでいるとお伽噺のように語られる。

それがもし事実だとしたら、この王太子は先祖返りなのだろう。至近距離にある男の顔を盗み見ても、業を使っているような素振りはない。だが外套の下、素肌を取り巻く空気は絶えず揺らめいている。水を含んだ重たい風と、熱を与えられて水気を飛ばされた軽い風が渦巻いているのだ。

外套は上質の羊毛で、暖かさに見合わず、とても軽い。不意の風で合わせ目がはためくので、ターナハースの体は見え隠れしているはずだった。心得て視線を反らす男たちの態度が、それを物語っている。

（なんて、王太子……！）

すべての元凶に抱えられたまま、為すすべもないことに目眩がした。

このまま連れ去られていいはずがない。

ジークフランド国も、その王太子も、何故か共にいる青年も、悪夢の根っこのようなものだ。十年かけて深く埋めてきた記憶を、わざわざ掘り起こしたいと誰が思うものか。



だが、望まぬ再会を果たしたセイランが、今どんな暮らしをしているのか、これまでどう生きてきたのか、ターナハースは気になってしまっている。会いたくなかったけれど、会ってしまったからには、知らぬ振りで忘れることはできそうになかった。

それが、すでに悪夢に捕まっている徴しるしだとしても。

リファラジークに気づかれないように、ちらりとセイランを見やった。

水の民の青年は、土の上に立ち止まった一団から少し離れ、ひとり、火の業の恩恵から外れていた。

しかし、濡れてはいない。

雨はセイランの体に触れると、宝石のように丸い粒になり、ころころぼろぼろと地面に転がり、そこで土に染み込んでいく。セイラン自身は雨に注意も払わず、自然に立って、両の親指と人差し指同士を合わせ、手で円を描いていた。

水は循環し、円に通じる。ゆえに業を高めるには自らの体で円を成せ。教書には、確かにそうあった。

（水の、業）

驚いた。そんなことができるようになっていたとは、思いもよらなかった。

「セイランはかなり使う。ウィハーシュ王家には及ばないらしいが」こっそりと窺っていたことも忘れ、凝視していたターナハースの耳元で、低く男が囁いた。

びくり、と体が縮んだが、初心な娘の反応ととったか軽く流され、ターナハースはほっとした。

そのまま俯いて、表情を隠しつつ、浮かんだ疑問に眉をひそめた。これだけ火の業、水の業に長けた者がいながら、なぜあの小屋に彼らはいたのか。

連想されたのは、誰もに忘れられた土地で見つけた、ジークファランド王家の紋章入りカフス。あの持ち主が、この王太子ではないと想定する方が、難しいだろう。だが、何故、あそこに。そして、

ここに。

思考は、清廉な水の気配に中断された。

セイランの正面に、水の壁が立ち上がっていた。楕円の形を持ち、湖を真上から覗いたように波が立っている。

目を眇めれば、波間に透けて、流麗な紋様が浮かんでは消え、回っては書き変わっているのが見えた。やがて紋様が定着し、水と同じ色になって不可視になるにつれ、水の壁は薄くなり表面は凧いできて、ついには水の鏡のようになった。

鏡と異なるのは、映るのがここではない晴れた空だということ。ウィハーシュでは見ることでできない、飛び抜けて青く高い空だ。そう思う間に、一行は順に水の鏡をくぐって、消えていった。

最後に、水を維持しているセイランと、王太子が残る。抱えられたターナハースも、当然残っていた。

「水陣を焼かないでくださいよ。もう一度繋ぐのは面倒なんです」眉を上げて、悪戯げにセイランが言うのに、リファラジークは鼻を鳴らしただけで、さっと水をくぐった。

くぐる直前、数粒の雨がターナハースの頬にかかった。火の業を抑えたのだろう。

だが、触れた水はそれだけで、清涼な水の香りが通り過ぎたと思えば、眼前にはそれまでと全く異なる景色が広がっていた。

（移動の水陣か。立ち上げも早かったし、揺らぎが少ない）

続いて陣をくぐってきたセイランが、わずかな疲れも見せていないのを見て、ターナハースは素直に感心した。

先に移動していた男たちは、近くに待機していた。主君の注意が向いていないからか、自分たちの領域に帰ってきたからか、皆の空気が和らいでいた。セイランも、何かを言い合いながら加わり、笑っていた。外見の違いはあれど、浮いている様子はない。

それは、ターナハースに驚くほどの安堵感を与えた。

辺りは、静かな林だった。

木はまばら。下生えも少ない。大半の地面は赤い土が剥き出しで、表面は砂っぽい。林の向こうには高い塀があり、その上に広がるのは、水を透かして見た、あの青空だ。

その色、空気の味、土の匂い。

どれもが、ウィハーシュとは明らかに異質だ。

（きっと、ジークフランドの都のどこかに直接移動したのね）

ターナハースはため息をついた。

都にたどり着く前に逃れたいと思っていたのに、まさか馬でも二十日以上かかる道のりをすっ飛ばされるとは。

これで猶予期間は、城に着くまでになった。王城などに連れて行かれてもすれば、姿をくらます機会は無くなるだろう。

一息ついた一行は、再び歩き出した。林の向こうにちらちらと見えていた、目に眩しい、白亜の建物に近づいていく。

近づくほど美しい建造物だった。要所に金で装飾が施され、窓には精緻な浮き彫りを施した濃茶の木格子が嵌り、屋根には赤を基調とした色とりどりの陶版が葺かれて空ときわどいほどの対比を成している。

どうやら、そこがひとまずの目的地らしいと察して、息を詰めた。緊張は、すぐさま男に伝わったらしい。ぐっと顎を押し当ててきた。こちらを見よ、と命じられたのがわかる。洪々、顔を上げれば、茶色の目が面白げに見下ろしてきていた。

「ここで待て。私は親父に呼ばれているらしい。すぐ戻る」

リファラジークが近づくと、重厚な佇まいの扉が内側から開かれ、中で侍女らしき者たちが一斉に腰を折って出迎えた。

「ジークフランド王城、王太子の翼棟だ。歓迎する」

言い放たれた言葉に、ターナハースは愕然とした。

「王城なのですか、ここは」

「内宮だ。あの城壁の向こうが王の翼棟だ。執政棟はさらにひとつ城壁を越える」

簡潔すぎる説明を咀嚼すれば、ここは王太子の内宮、すなわち私的な生活空間にあたる建物らしい。垣間見える塀が翼を隔てる城壁であり、その向こうに見える金の屋根の建物がジークフアランド国王の内宮、さらに向こうに遠く見える蒼い屋根の建物が執政棟だろうか。

そんな王城の中心にいきなり移動し、おそらくは王太子内宮の裏口らしきこの扉から意気揚々と帰還、ということか。

（無茶苦茶だわ）

警備の問題やら、体裁やら、気にしなくてはいけなことがあるのではないか、と他人事ながら渋い気持ちになったが、ここでは日常のことなのだろう。出迎えの人々は、落ち着いたものだった。

お帰りなさいませ、と一人の年嵩の女が代表して挨拶を済まし、何でもないことのように、そのまま陛下の元へ上がられますか、と尋ねてきた。裾に赤い刺繍の入った巻きスカートに、白絹の肩布を身につけ、きつちりと纏めた髪には赤珊瑚の飾りをつけている。優しげな立ち姿に反して冷静で鋭い目が、ターナハースをしっかりと捕らえていた。

「このままいく。エキドナ、これを頼む」

これ、というのが、自分のことだと、ターナハースは一拍遅れて悟った。

流れからして、裸のまま置いていかれるのかと焦ったが、リファラジークが外套を自分の肩から滑り落として巻き付けてきたので、ほっと息をついた。

下ろされ、久しぶりに自分の足で立てば、男の膝丈の外套が足首まで隠れる長さになった。そこから覗くのは、白い素足。すっかり乾いたが、下ろしたままの黒髪。この場には、あまりに異質な格好だ。

だがターナハースについて何も説明することなく、リファラジークはさつさと自分の宮に背を向け、土の上を歩き去った。王の内宮か執政棟へ、これまた裏口から行くのかもしれない。エキドナの背

後に控えていた侍女三人が、それを追いかけながら身だしなみを整えさせていく。

そして控えていた男たちも、任務を終え、立ち尽くすターナハースに形ばかりの会釈を残していなくなった。

セイランだけが残ったものの関心はなさそうで、ターナハースの目の前にはエキドナが、白髪混じりの頭を毅然と上げ、背筋をしゃんと伸ばして立っていた。

「エキドナと申します。……最近、変わったお召し物が流行していること」

きりり、と眦を上げて言い放つ様子は、とても怒っているようだった。

ターナハースが何と答えたのか戸惑っていると、思いがけずセイランが口を挟んだ。

「エキドナ、失礼。先に彼女と短く話すべきことがあるのだが、いいか？」

王太子付きの高位の女官であろう女が、セイランにお辞儀をして了承の答えを返した。そうになると、この場でターナハースが拒否する権限はない。おそろおそろ、後ろを振り向いた。

黒い瞳は、吸い込まれそうに深い。その瞳を見るのに、すこし上を向かねばならないことが、ターナハースの胸を締め付けた。

「ターナハース殿。あなたが医師として滞在していたエセルナの村は、シファアーナ城下の村ですね。ハスランの南」

「ええ……はい、そうです」

「では、殿下の命令通り私はそこに向きますが、医師を伴うのは明日以降のことになります。承知してください。……殿下が燃やしてしまわれた服の替わりなど、何か持ち帰った方がいいたら、今言っただけです」

やけに丁寧な言葉遣いなのが引かかったが、構っている余裕はなかった。

「あの、セイラン、様。私を帰してもらうわけには」

「いきません。殿下が決められたことです。従うべきでしょう」

問いかけを遮るようにして言い渡される。その言葉も、眼差しも、ごく事務的で淡々としたものだった。それでも、ターナハースは言い募った。

「でも、あまりに横暴です。いったい殿下は、何のつもりで私を連れてきたのですか」

「さあ、それは殿下に直接尋ねてください。……ひとつ、言っておくと、気に入られたら逃げるのは禁じ手です。逃げ出すものにも、とても、執着なさることがあるので」

殺されるかもしれません。

平坦な声と表情でそう言われ、半信半疑で黙り込んだ。そも、気に入られているのかもよくわからないのだ。

だが、これ以上言っても、帰してはもらえない。それだけは、よくわかった。

「……私は薬師の真似事をしながら、一人で旅をしまわっている身です。そもそもそんな大切なものを持っているわけでもありませんので、お願いするものではありません。ただ、ゼーネの、出産する娘の状態を見てくださいますか。お願いします」

「わかりました。戻ったら報告をしましょう。では、失礼」

ターナハースに、そしてエキドナに会釈をし、去っていく。その背を見送り、重い息をついたターナハースに、表情を改めたエキドナが、深く腰を折った。

## 5 火の国 王城（2）

「大変失礼な態度をとってしまいました。お詫びいたします」

柔らかな声音の謝罪の後、さすがというべき所作で姿勢を戻すと、すでに眼差しにさきほどまでの険は見られなかった。

今しがたの会話に何か見たのだろうと察したが、鍵となるものには思い当たらない。セイランは、もしかすると予想していたのかもしれない。

「冷えてお辛いことでしょう。まずは湯殿へご案内します。こちらへどうぞ」

エキドナ言葉に、指示を受けるまでもなく、背後の侍女らが動き出した。

導かれるまま明るい回廊を歩き、鮮やかな色の花々が咲く内庭を横切り、柱廊に囲まれた湯殿のある棟にたどり着くまで五分ほど。

付き添った侍女たち以外の人間に会わなかったのは、一流の気遣いなのだろう。道順をしつかり覚えながら歩いていたターナハースだが、回廊に敷き詰められた紅の絨毯に足が埋もれる感覚が大層心地よく、ふと苦笑した。寛ぐとき以外は靴を履く文化のこの国では、素足でこの上を歩いたのは自分くらいなものだろう、と他愛無いことを思つて。

促されて入った初めの部屋は、天井から床までタイル陶版を敷き詰めてある以外は、普通の部屋のようだった。絹張りの寝椅子には背枕が、クッション卓には花が飾られ、すでに温かな飲み物が用意されていた。色と香りからすると、珈琲だろう。

ターナハースは白く柔らかな布の浴衣を渡された。外套の下でそれを羽織り、外套を侍女に渡す。勧められて、寝椅子にソファかけて珈琲を飲んだ。

部屋の中は外よりも暖かく、さらに飲み物で、体はゆったりとほころんだ。ハスランよりも気温が高いジークフアランド王都だが、

それでも冷えていたらしいと、ようやく気づいた。

その緩みを察したように、エキドナが柔らかく話しかけてきた。

「まもなく、湯殿の準備が整います。天然の湯の泉から引いておりますので、ゆったりと暖まってくださいませ。中に、お背中と御髪を洗うお手伝いをする者がおります。オイルや石鹸など、細々したことについては彼女たちから説明いたします。よろしいでしょうか」「手伝いは、いりません」

「煩わしいかとも思いますが、お一人で湯殿をお使いいただくことはできないのです。ご容認ください」

なぜ、と尋ねるのもばかばかしい気がした。どのみち、許されな  
いのだ。押し問答になるのは明らかだった。好意的に理由を推測するならば、きっと王城内では定められた規則があるのだろう。例えば、身元がはつきりしない人間を一人にはしない、など。

ターナハースは、不承不承、拒否の言葉を飲み込んだ。

「わかりました。浴衣は着たままでいいですね？」

「結構です」

浴衣さえ着ていれば、万が一花が現れても見られずに済むだろう。ならばこれ以上逆らうのも面倒で、促されるまま湯殿に入った。

湯殿は、広かった。

温泉を引いていて、湯に限りがないからだろう。泳げるほどの広い浴槽からお湯が溢れていた。奥は柱廊を挟んで専用の内庭に解放されており、草花や木々がごく自然な佇まいで風に揺れている。床も壁も、一面陶版タイルで、そこにも花が描かれていた。

あの王太子もここに入るのかと思うと、ひどくそぐわない場所だった。が、あえて尋ねることでもないので沈黙した。

示されるまま、為されるがままに全身を洗い終わり、勧められて浴衣のまま湯につかる。

冷えていた体に、優しい温度。湯浴みは贅沢で、日常あまり機会はないが、疲れた体のみならず頭までほぐしてくれると知っていたから、ターナハースはせっかくの湯を存分に味わった。



一体、何故自分はここにいるのか。  
なぜ、こうなってしまったのか。

臍を噛む気持ちだったが、とりあえず頭から追いやった。思考を真つ白にして、神経の負荷をなくす。そうして労って初めて、いい考えが浮かぶものだ、と期待するしかないのだ。

湯から上がると、新しい浴衣を肩から着せかけられ、するりと古い浴衣が脱がされた。香油のマッサージを断って、先の部屋に戻れば、エキドナが少し困った顔をしていた。

「実は、急なことなのでお客様のための女性の服がございません。今手配中ですので、しばらくそのままで過ごしてくださいますか」

裸に一枚羽織るだけの状態は、心細い。王太子に一瞬で服を燃やされた時のことを一瞬思い出したが、嘘についている様子はない。

ターナハースはかすかに息をついた。主人が危険な人物でも、仕える者までそれに倣うとは思えないし、思いたくない。そう疑念を抑えこむと、次には手配中という言葉に困惑した。

「かまいません、けど、特別に用意していただくこともありません。男性の服でも、お仕着せでも結構ですけれど」

代案を申し入れると、意外にもすんなりと男物の服が差し出された。

「殿下がご成人前にお召しになられていたものです」

ぎょつとしたが、致し方ない。長く仕舞われていたとは思えないよい香りのする上質の服に袖を通すと、髪を丁寧に拭かれ、梳られた。

今度は果物が供され、薄く汗ばんだ顔には侍女の一人が優しく風を仰ぐ。

その扇をエキドナが受け取ってさつと侍女たちを見渡せば、皆が一斉に出て行ったので、人払いをしたのだとわかった。

「単刀直入にお伺いしたいことがございます」

断る理由はなかったので、うなずいた。

「ターナハース様に対して、殿下は、その、非道な仕打ちをなさつ

たのでしょうか」

少し言い淀んだものの、はっきりした声。だが、目には抑えきれない力が入り、ぴくぴくと瞼を震わせているのを見て、一瞬答えに詰まった。

「……いえ、そんなことは」

「ですが、先ほど服を燃やされたと、セイラン様がおっしゃっておりました」

上辺だけの否定は、よしとされならしい。それならば、と躊躇いながらも、ターナハースはこれまでの経緯をかいつまんで説明した。怒りが滲む隙がないようにできるだけ客観的に、そして最後に、何故そういうことになったのか、まったくわからないと付け加えて黙って聴いていたエキドナは、目を伏せて、首を振った。

「初めのご挨拶の折りの私の態度を、改めてお詫びいたします。まさか、そのような手段でお連れになったとは……」

苦渋を隠しきれず、声が揺れた。

だが、彼女がぐつと顔を上げた時、すべての感情の揺れを押さえ込んだのがわかった。

「私などには、殿下のお心の内はわかりかねます。ですが、きっと深いお考えがあつてのこと。どうぞ殿下を信じてくださいませ。……今は殿下に逆らつたりなさらず、お側にお仕えするのがよいでしょう。セイラン様のお言葉の通り、殿下の執着は激しいものがございます。愛情の深い方なのです」

労りのこもった、心からの言葉のようだった。ターナハースのこゝとを、案じている。

そして同時に、王太子のことを信じている、いや、信じたいのか。そしてより強い親愛の情がある。

攫われるように連行されたターナハースには、王太子の深い考えも、愛情深いという性質も、とても期待できるものではない。むしろ、大変な主を持っているものだと、エキドナに対して同情を感じてしまうほどだ。

複雑な気持ちで、あえて返事をしなかったのだが、エキドナはその意図を正しく汲み取ったようだった。

「今このようなことを申し上げても、あなた様には納得しがたいことでしょう。ひとつ、私がお約束いたしますのは、あなた様のご滞在中、せめてご不自由のないようお世話をさせていただきます。ご自分のためにも、くれぐれも短慮だけはないよう、お願いいたします」

主を信じ、擁護しつつも、ターナハースへの心遣いも形ばかりではない。

優しい人物なのだと、好感は持った。ただし、逃亡の手助けは期待できないが。

「ただこれはご承知おきください」と、侍女たちを再び部屋へ呼び戻したエキドナは、先ほどのまでの憂いをきれいに拭い去り、有能そうな美しい笑みを見せた。

「殿下がこの内宮に女性をお連れになったのは、初めてなのでございます」

ターナハースは、砂を飲み込んだような顔をした。エキドナがそう告げてくる意図を、理解したくない。

「私を、女性のうちに数えるべきではないかもしれません」  
むしろ、数えないでほしい。

願いながら固い声で言っただが、それ以外の目的がある方が不気味かもしれないと、自ら突っ込んだ。

## 6 火の国 王城（3）

王太子が戻ったのは、昼を過ぎたころだった。

食事を済ませ、案内された客室に付属した居室で暇を持て余し、飾り棚に置いてあった遊戯盤に駒を並べていたところに、突然本人が訪れた。

これまでターナハースが見た限り、この宮はどこも開放的だ。

部屋の入り口には飾り格子が嵌められていたが、扉の形に切り取られていて、そこに申し訳程度の薄い布が下がっている。窓は大きく何力所もあり、入り口と同じ意匠の格子が嵌められている。部屋のぐるりは奥行きのある柱廊で囲まれていた。

直接の日差しは入らず、気持ちのいい風が通るので、気候に合わせた仕様なのだろう。だが馴染まないターナハースにとっては、落ち着かない構造だった。

こうして、前触れもなく部屋に人が入って来ては、なおさら。

眉を寄せたターナハースに頓着せず、王太子はつかつかと近寄ると、卓にあつた飲みかけの茶をくつとあおった。

「面白い格好だな。動ける服で丁度いい、出かける。エキドナ」

ここに、と戸口に控えるのを、一瞥もしない。

「夕食は戻って共にとる。それまでに服を調達してくれ。これでは、色気がない」

言いたい放題の後、付いて来いと命じてくぐったばかりの入り口から出て行ったのを慌てて追いかけた。

回廊から外れて、内庭と部屋とをいくつか突っ切り、ほぼ直線で移動して、厩舎に着いた。

待機していた男二人の顔に見覚えがあつたから、先ほどの男たちの中にいたのかもしれない。彼らは、護衛のようだった。

口を開く間もなく、王太子の鞍上に抱え上げられた。走り出した馬は内宮を囲う城壁の門を容易く通り抜け、執政棟のある敷地に入

ったようだった。

各所の門は手厚く警護され、隙はなかった。だが、王太子にとっては馬の歩みを緩める必要すらないのだ。

王城の中でも裏通りなのだろう。人の少ない道を早足で進む。

どこへ、何のために。

わからないことばかりだ。

ターナハースを連れて、執務ではないだろう。だが散歩というのは馬の足は速すぎたし、なによりこの王太子に似合わない気がした。（もしかして、放免される、とか）

そんなはずはない。

かすかな期待を自分で打ち消す。

かわりに、両腕で挟まれて馬上で揺られながら、ターナハースは地理を頭に叩き込んでいった。馬で駆けて移動するほど広い王域にもめげず、いざという時逃げ道を選ぶためだったので、耳の上から、道をよく覚えておけ、と言われて戸惑った。

「その様子だと馬には乗れるな。王城内では不可欠だ。用意させる」理解ができず、体をよじって振り返る。

目と鼻の先に形の良い顎があつて、ターナハースの額をぐいっと押してきた。

「前を向け」

距離の近さに慌てて身を縮めて息をついた。額をかすめた唇が胸に触れた感覚は、まだ新しい。

沈黙のまま、ようやく馬が止まったのは、見るからに王城の外れ、城壁に寄りかかるように佇む質素な建物の前だった。

陶版タイルはおろか一切の飾り気のない石の壁は白塗りがところどころ剥がれ、周囲の木が繁りすぎているためか薄暗い印象が強い。中はひっそりとして、人の気配がない。

馬から下ろされながら、ふと嗅ぎ慣れた匂いがして、眉をひそめた。

王太子が躊躇いもなく表戸を開け放ったところで、「ははあつ」と甲高い声を上げながら、男が一人、腰を屈めて走り出てきた。

よく肥え、その代わりのように貧相な髪をした男は、小刀と針の紋章を縫い取った薄青色の長いローブをまとっていた。近付くと気がつく、薬草の匂い。男は、医師だ。

「これはこれは、王太子殿下。このようなところに御足をお運びいただき……」

「今日からこの施療院は私の施設となった。お前がゲツハという医師であれば、今すぐ王都中央医局へ出向き、手続きをせよ。ここでの勤務は不要だ」

まったく事情を知らないターナハースでも、その措置がよくないものだろうと察しがつくほど、冷たく切り捨てるような言葉だったのだが、男は喜色一面、踊るようにそわそわと腰を動かした。

「ま、まことでございますか。中央医局で働くことが私の夢……！わかりました。今、今すぐに！」

駆け出てきた時よりも早く取って返した男を、もはや羽虫か小石にしか感じていなさそうな様子で、王太子は建物に踏み入った。

暗い。

内壁は石が黒く変色し、雨の日の洞窟のような、鬱とした空間を作っていた。廊下には窓がなく、昼間にもかかわらず灯火が置かれていたが、まるで数が足りずに、かえって周囲に闇を生み出していた。

「ネイ副院長はいるか」

さすがに案内がなかったのか、入ってすぐに誰何した王太子に、すぐ横の部屋から応えがあった。

「ここにあります。少々お待ちくださいませ」

目が慣れれば、部屋の扉は開け放たれていた。やはり暗い室内で、患者に服を着せていた細身の女が、渋い声と顔をこちらに向けていた。

年の頃は四十過ぎに見えた。灰色の混ざった髪はきっちりと後ろ

で纏められていたが、化粧気はなく、身につけているものもどことなく古びていて、手はひどく荒れていた。

下働きの女にしか見えないのに、やがてすたすたと廊下に出てきて、背筋を伸ばして自国の王太子を睨みつけた様は、王侯貴族のように雅でいて誇り高かった。

「殿下、状況に斟酌なく、ご自分のなさりたいように事を運ぶのはおやめください。ゲツハ医師の事務手続きなんてくそくらえです。診察を放って出ていくなんて。代わりの医師は、ちゃんと回していただけるんでしょうね」

「地獄耳だな、ネイ。数年ぶりに会ったと思うが、まずそれか」

王太子が、呆れたように言いながら、笑っている。

それだけで、このネイという女性が、王太子にとって特別親しい関係にあることがわかった。

「私の管轄の施療院として、ここの格付けを上げた。自動的に、医師資格取得のためにここでの二ヶ月研修が義務づけられることになる」

「結構なお手配でございます。明日から早速来させていただきます」  
奥で、ゲツハ医師が慌ただしく荷物をまとめている気配がしたが、ネイは一切視線を向けなかった。

「でも、意地の悪いなさりよう。ゲツハ医師の腕では、中央医局で満足に診察もさせてもらえないでしょう。研修医でも、あれよりはましです。あれを追い出してくださった事だけは、感謝してもよいかもしれません。あとは、殿下の思惑を窺ってからにいたします」

さあ、話せ。そう言わんばかりに鋭い眼差しを緩めないネイに、背後の護衛の男たちが笑いを堪えたようだった。王太子がいつ怒りだすかと肝を冷やしたターナハースには、それは意外なことだった。王太子が愉快そうに笑うのを聞いてさらに。

「相変わらずだな、ネイ。それで、経営はどうだ、と聞くまでもないか。王は渋いからな」

さらりと言い捨てられたが、鋭い批判のようでもあった。

さすがにというか、ようやくというか、ネイは患者たちを気にしたようだった。私室らしき部屋に客を招き入れてから、首を横に振った。

「洪さにも、限度があります。なんのために施療院を設けているのだか！ もうぎりぎりの状態です。患者からは取れず、国からも与えられず。保証されているのは医師の給与だけ。医療器具はおるか、シーツの替えすら買えません」

「王よりは援助する気がある。だが、垂れ流しにはできん。収入源を作れ。五年で自立経営ができるようにしろ」

「無茶です。この施設の存在意義は利潤とは対極にあります」

「やらねば、存在していけない。それだけだ」

為政者の立場にある王太子の断定に、ターナハースはひそかに苦い顔をした。

垣間見えた患者たちは、みな「神の落し子」だった。それは世界中で、ある頻度で産まれてくる、不治の病を背負った特異な子どもだ。姿形の奇怪さゆえに疎まれ、産まれてすぐに捨てられてしまいう子が多い。あるいは同じくらいの数が、親に密かに殺されているかもしれない。殺されず、捨てられずとも、生まれつき体は弱く成人する見込みはほとんどない。

彼らから治療費を取れるはずがなく、また彼らを受け入れる施療院がどんな利潤も望めるものではないのは、よくわかった。

「よく考える。それと、ターナハース」

物思いに沈んでいたところを突然呼ばれ、はつと顔を上げた。

「ネイ副院長だ。医師でもある。ネイ、ターナハースだ。在野の医師だそうだ。まず、そうだな、ターナハース。名はどう綴る？」

王太子の、というよりリファジークという男のペースにどこまでも飲まれていきそうで、ターナハースは目眩を覚えながらもネイに一礼をした。

医師の真似事をする薬師であり、正規の資格ではないという申し立てをする隙はない。



話の流れを遮る事は、王太子の意志なくば至難のようだ。

これからどういうことになるのか、不安に口ごもったターナハースの目の前に、無造作に紙片が差し出された。

「ここに書け」

理由を説明する気はさらさらないらしい。

ちよつとした綴りの違いで、細かな発音が異なることもあるので、ターナハースは特に抵抗もせず、ネイのペンと机の端を借りてさらさらと走り書きをした。したのだが、書き終わる頃に嫌な予感に襲われた。

紙はそれなりに貴重品だ。しかもこの書き味は、上質な紙だろう。名の綴りを確かめるだけに、わざわざ使うようなものではない。

だが躊躇いに手が止まったのは名を書き終えてからで、すぐさま王太子の手が伸びて紙片を奪っていった。

それが目の前で広げられて、裏に隠れていた書面が現れるのを見た時には、何故と問うのにも疲れて、握り込んだ片手を額に当てて重たい息をついた。

王太子は委細気にせず、ネイに向かって唇の片側を上げて見せた。「これで、私の全権代理人としてターナハースをここの院長とした」ターナハースの視線が、ネイの茶色い瞳とぶつかった。

## 7 火の国 王城（4）

「今後はすべての決にターナハースの印が要る。言い換えれば、ターナハースの印があれば私の許可は不要だ」

「殿下！」

……いえ、ジーク、様」

ターナハースはたまらず、口を挟んだ。

だがあまりの衝撃に、言葉が続かない。その様を面白そうに眺めるのを見れば、口を挟ませるよう、隙を作ったのではないかと勘繰ってしまう。

誰もがターナハースの発言を待ったので、苦し紛れに絞り出した。「お戯れはやめてください。私が院長なんて、悪い冗談です。……この国の政に通じてもおらず、経営に詳しいわけでもない。役に立ちません」

言ってみれば、まったくの正論になった。だがこの王太子には、逆効果のようだった。

茶色い目が、ずっと細められた。愉快げな色はたちどころに消え去り、こころなしか、周囲の気温が下がったように感じられた。

「ならば、何もせずば良い。決がなければあらゆる手続きが滞り、施設は金を使えないが」

本心から言っているようだった。ネイのことすら、気にかけていない。

ターナハースは、胃が凍るようだった。

施設を王から譲り受けたのは、政治絡みでも、ネイのためでも、まして落とし子たちのためでもなく、ターナハースを責任ある立場に据え、容易に逃亡できないようにするためではないだろうか。

（まさか。そこまでしないはずよ。会ったばかりの市井の娘に）

非常識な想像を、直後に自ら否定する。

だが、自分の態度次第で、この王太子はあっさりとこの施設を見

捨てるのではないか。そんな消し去れない不安が、ターナハースの反論を封じた。

「一人、執務補佐をつける。書類の作り方くらい、すぐに覚えてしまえよ」

ターナハースの沈黙で諦めを察したか、追いつめようと告げる王太子に、背後の男達も、ネイすらも何も言わなかった。不安や不満を抱いていないはずがないのに。

「夕刻迎えに来る。それまで、ここを見ておけ」

周囲の思惑を関知せず、王太子は男達を引き連れて施設を辞した。ネイも見送りに出て、ターナハースは一人、部屋に立ち尽くした。王太子から離れ、人の目の少ない王城の外れで、部屋に一人。大きく開け放たれた窓は、玄関からは死角に向いている。

足を踏み出して窓に歩み寄り、腰までの高さの窓枠を乗り越越えれば。

それだけ。それだけで、やけに懐かしい、穏やかなあの村に帰れるような気がした。自分を待っている不安そうな若い娘が、ほっと安心の息をついて大きな腹を撫でる様が見えるような気がした。

だが、窓の反対、細く空いた扉の向こうから、暗く湿った廊下の空気が手を伸ばし、ターナハースの足首をがっちりと掴んでいた。

（これでは、流されていってしまう）

わかっていても、すでに見事に質をとられてしまったようだ。手遅れだった。これが王太子の策だとしたら、見事に功を奏したわけだ。

かといって、村に帰ることを諦めることも、若い妊婦を見捨てることもできない。

苦悶に顔色を失っていたターナハースに、戻ったネイは椅子を勧めてくれた。

「いったい、貴方は何者ですか。……どうして、こんなことに」

尋ねられても、答えを持たないから、首を振るしかない。

ネイは疑わしげにその様を見つめていたが、ま、いいです、と早

々に見切りをつけた。

「理由や目的がなんであれ、あれほど執着している殿下はどうにもなりません。誰が何を言っても無駄でしょう。お気の済むのを待つしかありません。この施療院の命運まで貴方に握られるのは、心穏やかではないけれどね」

「……こういうことは、よくあるのですか？ 皆さん、困ってはいなくても驚かないのですね」

本当に、不思議だった。

その問い掛けに、ネイはやや虚を突かれたようだった。

「貴方は殿下のことをあまり知らないのですね」

私は十分に驚いています。ただ、殿下は一度決めたことは滅多に覆さないことを、私も、皆さんも知っているのです。……語られなくともそこに深いお考えがあることも。だから、皆、従います」  
ただ、とネイは続けた。

「女性に関する噂は数多聞きましたが、仕事を与えてまで留めようとした方は初めてではないかしら」

ターナハースは、口を真一文字に引き結び、自分が封じた疑念を不意打ちのように叩きつけられた衝撃に耐えようとした。

他者からもそう見えるなら、今の自分は致命的な罠に向かって追いつめられている獲物なのではないか。

「留める、ための院長代理の座、ですか……？」

少しでも否定が欲しくて呟いたのだが。

「他にどんな意図があり得ますか？ 貴方は気が向かなければ、何も、院の行く末も煩雑な手続きも気にかける必要はない。飾りの仕事でしょう？」

ネイという女性の話しぶりは率直で、傍で聞いていれば小気味いいが、正面で受け止めるには切れ味が良すぎた。

あり得ない、と言ひ募ることもできず、ターナハースは黙り込んだ。

いったいどうやってこの状況から逃げたらいいのか、途方に暮れ

る。このまま流されて王太子の側に仕えることになるのは、どうしても避けたいところだった。

考えあぐねるのに、ネイは事務的に尋ねた。

「で、施療院を案内しましょうか。医師でしたら、診察を手伝ってくださいれば嬉しいのですが」

まったく逆の意図が乗せられた、淡泊な声。

ターナハースは、せめて顔を俯かせないよう、真っ直ぐに見返した。

「私は医師ではありません。滞在していた村では、真似事のようなことはしていましたが、正規の資格はもっていません。……それでも、手伝いならできます。よろしく願います」

意志と関係なく負わされた責ではあっても、黙って負わされた時点で、おざなりにするつもりはなかった。できることは、したかった。

（最後には、傷つくものなく逃れること。それを忘れないように、ね）

ターナハースが立ち上がると、ネイは肩をすくめてさっさと部屋を後にした。

施療院は二階建てで、一階には症状の軽い患者の部屋と、食堂、施術室、調剤室などが配され、二階には重篤な患者が暮らしている。

患者の平均年齢は十一歳だが、年齢が上がるとともに症状が悪化する傾向が強いので、一階と二階で子どもたちの様相は異なった。

一階は大部屋ばかりで、皆ですり切れた絵本を読んだり、くたびれた人形でままごとをしたり、小さい子を大きい子があやしたりと和やかだった。ただ、どの子も顔色は悪くおとなしい。幼児特有のかしみがまるでなく、それが痛ましかった。

ここでは診療といっても、体温を測り、簡単な問診をしていくだけだ。

「ネイ先生、こんにちは」

わらわらと寄ってくるのに、ネイは相好を崩して相手をした。

絵本の文字を尋ねた少女は、愛らしい顔立ちをしていたが、体毛全てがなかった。その隣でぼんやりと知恵の輪をいじっていた少年は、皮膚の色が夜のように黒かった……。

異形の子たちは、親に殺されずに生き延びても十代後半までの命だ。どんなに元気な子でも、二十まで生きた例はないという。

厳しかった顔を緩めて対応するネイは、そんな沈痛さをきれいに隠していた。

一階に比べて、二階はひどく静かだ。

ゲッハ医師が出て行き、ネイと食事を担当する老婆がひとり、それでここの職員は全てだという。今は、二階で廊下を行き来するのはターナハースとネイだけだ。子どもたちは、皆寝台から離れられない。

一人の子供は、男の子か女の子か分からない。皮膚のあちこちが乾いた樹皮のように細かくひび割れ、左頬と左耳の後ろには、薄くめくれた皮膚が髪飾りの花のようにひらひらと揺れていた。体全体が、青緑色に淡く光っている。

寝台の上で上体を起こし、ひび割れた瞼の奥の眼を小さな窓の外に向けていた子供に、ネイは屈みこんで具合を尋ねた。

「サーラ、今日はすこしい感じかしら」

サーラは反応しなかった。ネイも、あえて問いを重ねはしない。黙って辺りの床やシーツにこぼれ落ちている皮膚の欠片を、手袋をはめて回収し、枕を払った。シーツや枕を取り換える余裕は少ない。枕の所々に皮膚片が擦れ、色が染みていた。

悲しげにそれを見て首を振り、次の患者に向かおうとした時、サーラがぐつと喉を鳴らした。

「サーラ？」

慌てて振り返ったネイの目前で、細い体がぶるぶると震えていたかと思うと、激しく咳き込んだ。その鼻と口から、煌めく粒子がま

き散らされるのが見えた。

極少の金片のように、息に乗ってくるくと回る粉。

その中にネイが突っ込みそうになったのを、ターナハースはかるうじて抑えた。

「何をするの、サーラが！」

「今はだめです。目と喉が焼けてしまう」

粉が肌に触れるだけで、鋭い痛みが走るのだ。粘膜に付着すれば、毒となる。

「……でも、苦しんで」

「すぐに収まります。もう少し待ってください」

## 8 火の国 王城（5）

今にも振り払われそうなのを、関節を押さえ込んで説いた。

その間に、徐々に粉の量は減った。咳き込みは依然激しいが、吐息に含まれる粒子は、もう見えなかった。

ほっと力の緩んだネイを放し、ターナハースは屈みこんでサーラに目線を合わせた。

「サーラ、苦しいのを取ってあげる。少し、息を止めて、口を開けて」

小さな顎に手を添えて仰向かせると、辛そうにしつつも息をこらえ、そつと口を開いた。

「いい子ね。……見えた」

口の中でも、欠片がめくれている。白い歯列の奥、息に沿って揺れる欠片の波間に、はたはたと動くものを見つけて、ターナハースはさつとそれを摘み取った。ネイが、半ば呆然としながらも受取って、サーラの目の届かないところに隠した。

「さあ、少し喉に欠片が詰まったのね。……もう大丈夫かな？」

咳は、ぴたりと止まっていた。

サーラは目をぱちくりとして、こくりと頷き、爪も捲れた指で、そつと喉を確認した。

「喉が痛むから、なるべく水を飲んだ方がいいかもね」

安心しきったのか、素直に、側の小机にあつた水を飲んだが、ターナハースはそれを見て一瞬顔をしかめた。

水が、濁っていた。乾いた土地の多いジークフアランドであつても、こうまで質の悪い水しかないものなのか。

落ち着いたサーラを残して部屋から出たところで、ネイが渡されたものを改めて見つめて、硬い声で尋ねてきた。

「これは、いったい……」

ネイの手の平に広げられた布切れに置かれていたのは、茶色い翹



の真ん中に大きな黄色い目玉模様のある蝶だった。脚も触覚も揃っている。ターナハースが指の平で押し潰すまでは、翅をばたつかせて生きていたものだ。

なぜ、これがサーラの口に。

ターナハースはしばらく逡巡した。

話すことの是非を迷ったのではない。ネイに話さなければ、今後サーラに発作が起こった時、対応できない。

だが、どこまで、どう話せばいいのか、束の間考えた。

「以前、同じ症例を見たことがあります。乾くと、蝶が現れやすい。蝶は粘膜付近に現れやすく、喉などに現れれば呼吸を妨げるようです。」

取れるような場所なら、鱗粉が吹き出されるのが落ち着くのを待って、さっきのように取るのが一番いいでしょう。でも、取れない場所だと、難しいことになります。

なるべく水分を取らせて、乾燥を避けると症状が緩やかになります。はちみつなどで少し粘りをつけると、もっともつでしょう」

ネイは、目を見開いた。

神の落とし子たちは、似た症状もあるとはいえ、千差万別だ。さらに彼らは迫害されるか隠されるため、このように特殊な施療院でなければ、巡り合うことも稀とされる。その反応は、もっともだった。

「その話しぶりだと、多くの症例を見ていそうですね。いったい……」

「旅をしていると、いろんな土地があつて。中には、落とし子たちを慈しんで育てる村もありました」

疑問を先取りして答えたターナハースは、それで口を噤んだ。村のことは、あまり話せない。そしてそれよりも、ネイが気が抜けたように、ぼんやりと疲れた顔をしていることに気がついたからだつた。

「ネイさん？ 顔色がよくない。もう診療を始めて二時間です。少

し休んではいかがですか」

だがネイは、静かに首を振った。

「いいえ。休んでいては夕食の準備までに終わらないので、困ります」

「……夕食はどなたが？」

「食事の用意はルートさんが。配膳は私も手伝いますが、回収と片づけも任せます」

返事にほんの少し安心したが、ネイの様子を見れば過労にまちがいが無い。

だがやるべきことを思い出したネイは、表情を改めてさつさと次の部屋へ向かった。

「ターナハースさん、手伝ってくださいるなら、少しは早く済みます、きつと」

照れ隠しのようにぶっきらぼうな言い方だったが、ネイが背中です誘ってきた。

さすがに嬉しくて、唇がゆるんだ。

これも王太子の策のうちかと、心のどこかで勘繰りながら。

## 8 火の国 王城（5）（後書き）

つわりでしばらく苦しんでいました。短めですが、2話投稿します。

## 9 火の国 王城（6）

四時間かけて各部屋を回り、ネイの部屋に戻ると、そこには先客がいた。

迎えに来るといつていた王太子ではない。先ほど連れ立ってきた男の一人が、静かに振り向いてかつりと踵を合わせた。

「失礼して待たせていただきました。殿下は政務のためにおいでになることができません。ターナハース殿には馬を引いて参りましたので、私とともに王太子翼にお戻りいただきます」

「お待ちせして、こちらこそ失礼いたしました。殿下によろしくお伝えください。……ターナハース様は今後どのように？ 私が連絡をとりたい時は、どうしたらよろしいのかしら」

それはターナハースには答えようのない質問だったから、二人、男を見た。

若く優しい顔立ちの青年は、感情をうかがわせない微笑みを浮かべた。

「ターナハース殿は、王太子翼に滞在なさるご予定です。専任の護衛と連絡官と侍女がつき、こちらにはまずは週三日通われることになっていきます」

ターナハースは、とっさに把握できず、呆然とした。

「護衛と、連絡官と、侍女……？ それではまるで、側近のような……」

ネイが、擦れた声を出してこちらを振り向いた。いったい何をしてかしたの、と顔に書いてあった。わずかに心配そうな色が見えたのが救いだっただが。

次の瞬間には一切の疑問を押し殺したのだろう。ある意味無情に、さっと頭を下げて、ターナハースを送り出した。

ターナハースに与えられた馬は、黒毛の見事な若駒だった。賢そ

うな目で新しい主人を受け入れ、素直に背中に乗せた。

「皆が揃って改めてご挨拶をいたしますが、私はウィートハルト・フアランドと申します。あなたの護衛を任じられました」

さらりと言われて驚いた。

王太子付の立場にあつた者が、女の護衛とは。不本意なことだろう。だが男は柔らかな表情のままターナハースを見つめてくる。王太子の命となれば、不快な感情すら隠しきってしまうのかも知れない。

「ウィートハルトさん、殿下は、私をいったいどうするおつもりでしょうか。一時の気紛れで、いずれ興味をなくされるのならいいですが」

半馬遅れた位置に馬を寄せ、さりげなく方向を示していたウィートハルトは、少し労るような表情をした。

「何も心配なさることはありません。殿下はあなたをとてども気に入られたようです。気紛れではなく、深いお考えがあるのでしょう」

王太子の周辺の人間は、みな同じ答えを信じているようだった。食い下がって尋ねても、ターナハースが求めているような言葉は返らないだろう。口を引き結んで俯いたが、ウィートハルトを困らせるのも嫌で、何とか頭を切り替えることにした。

柔らかに促されるまま、馬を走らせる。

「先ほど殿下と一緒に居られた方々は、殿下の側近でいらっしゃるのですか」

「はい、その一部です。通称として赫近衛と呼ばれています。多くは武官ですが、一部は文官も兼ね、護衛をするとともに政務をお助けいたします。貴族の子弟が多いですが、殿下が野から見出した者もおります」

文字通り、将来この国を背負う若者たちということだ。

「一人、黒髪の方がいらっしゃいました」

「セイランですか。彼も側近の一人です。ウィハーシュの出身ですが、幼い頃から殿下の元で育った切れ者です」

ことさら言葉が重ねられたのは、同じくウィハーシュ出身のターナハースの気を引き立てるためだろうか。

だが語られた言葉が纏っていた、仲間を語る気安い響きが、ターナハースの胸の内側をちりちりと刺激した。

（なんだろう）

自分で内心顔を顰めたが、あえて深入りは避けた。ふと、思い出したことを尋ねてみた。

「そういえば、あの小屋のあった森には、殿下は何をなさりにいらしていたのですか？ 雨よけの術をお持ちなのに、小屋で雨宿りなんて、理由があるのかと」

わずかに、青年の頬が固くなったように見えた。が、それも一瞬のこと。え、と思う間に、柔らかい笑みを取り戻していた。

「あの森で、殿下とセイランが出会ったとかで、たまに息抜きに行くのです。視察という名目がありますが、あんな強い雨を楽しむことができるのは、ハスランしかないですからね」

違和感を感じた。

あの王太子が、息抜きを必要とするような人間だろうか。息抜きというのは、自分を押え付けているものから、一時的に逃れることだ。ジークフアランドという男は、王太子という重い責務すら、持つて生まれた剛毅な気質で飲み込んで、自然体でいるようにしか見えない。

ましてあんな、合理的を地でいく男が、苦もなく避けられる雨に降り籠められるなどということを、目的無しにすることは思えない。

だが、遭遇してまだ数時間。意外な趣味を持っている可能性を全否定はできまいと、これもまた深入りを避けて口をつぐんだ。

王太子翼に戻れば、初めて見る顔が三人待っていた。

やや幼さが残る侍女はエスターと名乗った。小動物のような丸い

瞳が印象的だったが、立ち居振る舞いはとても洗練されていた。

物腰が柔らかな初老の男は、鋭い目をしてターナハースをはつきりと吟味していた。エルドリックという名で、ターナハースと外部との連絡係だという。個人的な執事のようなものです、とウィートハルトが注釈した。

残る一人は、これといって特徴のない顔立ちと体型の中年にさしかかった男だった。ところが隙のない装いと立ち姿からは、一切の無駄を嫌い、能率の向上を最優先する心根が透けて見え、実はターナハースを一番釘付けにした。存在感は、ものすごい。彼は、ぼそりとした声で、タルスと名を告げた。

「そして私、ウィートハルトです。王太子殿下の命により、あなたにお仕えいたします。どうぞお引き立てのほどお願いいたします」  
皆が一斉にターナハースに腰を折った。

## 10 火の国王城（7）

ずしり、と重たい手が肩にかけられたようで、体が傾いだ。

「屋内ではエスターが、屋外では私が常におそばにお控えすることをお許しください。エルドリックは貴方の公私にわたって事務的なお世話をいたします。今後は毎日朝食の際に、当日のご予定をエルドリックにご確認下さい。タルスは本来の業務の合間を縫って講義と補佐をする立場なので、常におそばにいるわけではありませんが、王宮内では何があるかと貴方の味方となる四人です」

ターナハースは返答できない。決定事項を伝えられている。それに対する反論は受け入れられないだろう。

だが、かといって、頷けるはずがない。

顔色をなくしたターナハースに、ウィートハルトはこだわらなかつた。

「では、ここからはエルドリックから」

あつさりと主導権を同僚に引き渡すと、あくまで自然に、ターナハースの右後方に控えた。示し合わせたように、エスターが左後方に移動し、そつとソファを示した。

ウィートハルトとともに部屋に入り、間を置かずに三人の紹介となったので、ターナハースは立ち尽くしたままだったのだ。

「どうぞ、おかけになってください。お疲れでしょう」

もはやそこで抵抗することに何の意義も見いだせず、息を詰めたまま、固い姿勢で座った。そうしてみると、どことなく視界が遠くなり、劇の上映を見ているような、すべて他人事のような気になってきた。

現実逃避だ。自分でよくわかっている。

エルドリックは丁寧な一礼をすると、まずは、と口を開いた。

「あなた様の現在のお立場のご説明いたしましょう。本日付けで、ターナハース様は尚書院の三等尚務官の役職に任じられました。そ



の肩書きをもって、王太子殿下の執務補佐見習いとイトハート施療院の院長代理を兼任なさることとなります。まずは院長代理の執務を集中的に学べるよう、執務補佐見習いの業務は一ヶ月間は免じるおつもりと、殿下よりうかがっております。

今後しばらくは、毎日タルス殿の講義と執務、週に三日施療院での現場指示が、基本的なあなた様の業務となります。また、執務上必要な人脈の構築のため、面談や食事会の予定が入ることもございましょう。細かなご予定については、毎朝および随時、ご報告いたします。まず今日は、この後夕食までタルス殿の講義をお受けになつてください。夕食は殿下も一緒なさるご予定です」

なにか、ご質問があれば承ります、とエルドリックは数秒ターナハースを見つめたが、すぐにゆるやかに頷いた。

「何かありましたら、いつでもお声をおかけください」

質問どころではない、自分の現状を把握することすらできていないのは、丸分かりらしかった。

エルドリックとワイトハルトは部屋を辞し、その後ろ姿を苦い思いで見送る間に、エスターがソファで書き物をするために膝に置いて使う小さな携帯用の卓と筆記具を用意してきた。

渡されて、ペンを握り、まるでその気もないのに初めて文字を習わされる幼子のようにだと、現実に戻ってこられない頭でばんやりと思う。

そのとりとめのない思考が、どんつと床を揺らすほどの重量をもつて目の前の机に積まれた書籍の山に、容赦なく打ち切られた。

「時間は無駄にしてはなりません。始めましょう」

前置きを一切廃した、開始の宣言だった。

「単純な事務処理は前例の真似をすればよろしい。けれど、いちいちの事務処理の目的を意識し、根拠を知ることがなくば、前例にこ

だわるばかりの能無しとなります」

と、初めに言い放ったタルスは、今朝は何を食べましたか、と尋ねるように、平坦に問い掛けてきた。

「まず、本日施療院を訪れて、何か問題点などに気付きましたか」

まるで、本当の教師のようだった。だから、他国の施設について物申すことを意識せず、ターナハースはただ、目に焼き付いていたものを挙げていった。

「医師や人手が足りていません。入院設備の消耗品も不足していました。……飲み水を確保できていないようでした」

「研修医以外に常駐の医師あるいは職員を雇いたい場合は、人事省へ。備品の要求であれば、運営費から充当するよう王太子殿下の経理担当へ。飲用水については、少しややこしい。これを、まずは取り上げましょう」

打てば響く。

淀みなく、淡々と語る声には芯があり、耳に通る。

施療院の、暗く重たい廊下を思い出していたのが、ずっと引き戻された。

「この国には、水が乏しいのです。王城の水は、どう工面しているかご存知か。はるか北の山脈から、緩やかな斜面を利用して水を流し入れているのです。その水路は、500年も前に築かれたもの。修繕しつつ使ってきましたが、王都が発展してきて、もう機能が追いつかなくなっている。山麓水と呼ばれるよい水は限られた量しかなく、手に入れられない人々は質の悪い水しか湧かない井戸を利用する。それは、王城内でも同様なのです」

違和感が、ターナハースを襲った。

あの温かな水の匂いに満ちた部屋は、なんだったのだろう。

だが、国の最高峰の宮殿ゆえの贅沢だとは、何故か思えなかった。それで、素直に教師役に尋ねることにした。

「温泉の湯は、飲めないもののですか？」

「多少、話が逸れておりますが、まあいいでしょう。王宮内に湧く

温泉の湯には、多種の鉱物が多く含まれているため、飲用には適しません。井戸の水は鉱物の含有量は高いが、適切なる過さえずれば、飲んで胃腸を壊すことはありません」

さて、とタルスが流れを切り替えた。

「施療院での飲用水がまともなものでない理由は、何が考えられますか」

「……その、山麓水の量が限られていること、ですか。でも、すぐに改善するのは難しそうです。……山麓水を融通してもらうのに必要な何かがないから、でしょうか。あとは、もしかして、井戸水の適切なる過すらできていない……？」

「解決法に優先順位をつけるとしたら、どうしますか」

明快な回答がないことが肯定なのか。

無駄な言葉は決して発すまいとするようなタルスを相手に、ターナハースはぐるぐると思考を回さねばならなかった。

「ろ過装置の設置が、解決が一番早いかと……」

「設備の修理あるいは新規導入は、王太子殿下の経理担当へ申請すべきことになります。参考まで、これが申請書の例です」

書類の山の中腹から、まとまった紙束が引き抜かれた。エスターが機を外さずに受取った。ターナハースが受取ったことになるのだらう。

「ただ、施療院という施設の性格を考慮すると、いかに飲用可能な水とはいえ、井戸水は最適ではありませんまい。山麓水を融通してもらうに越したことはありません。施療院が殿下の直営となったことで格が上がり、山麓水使用の優先順位が変わっていると思われるので、申請する意義はあるでしょう。これは、治水局への申請となります。ここに、申請書の例があります。……ただ、是非の判断は局内のこととなりますので、安易な予測はできません」

予測はできない、と言い捨てた語尾がやや激しくて、ターナハースはタルスをまじまじと見つめてしまった。その視線をちらりと一瞥で跳ね返し、タルスは薄い肩をすくめた。

「治水局は旧貴族たちの溜まり場のようなものでして、山麓水の使用权付与の順位付けについて明確な条件を呈示していません。当然、賄賂や裏取引が隠された順位決定過程に影響を及ぼしているでしょう。それに溺れている局の幹部たちは、本来の業務である治水の見直しについても、まるで積極的ではないわけです」

タルスは、治水局あるいは旧貴族に対して、心底からの嫌悪感を抱いているようだった。

それに煽られたのか、それとも「水」が不当に支配されている感覚のせいかわかり、と胸の底が不快に波打った。その余波が表に浮き出てくる、。

「で、どうしますか」

唐突に振られて、ターナハースは目を瞬いた。

「治水局への申請には、賄賂が付き物と考えるかどうか、です。目的のためなら長い物に巻かれることも必要でしょう」

声は平坦なものに戻っていた。だから、タルスが彼の中で葛藤や矛盾なく、あつたとしても消化してしまっていることがよくわかった。

「え、と。それは……賄賂を送りたいといつて、送れるものなのですか？」

「私は、貴方を使えるようにせよと命じられました。使える人間とは、目的を達成できる人間と思っております。送りたいと、貴方が考えるなら、送るためのあらゆる手段を飲み込んでいただきます。

おわかりか？ 貴方の質問は、的を外れています」

それは王太子の意図なのか、タルス個人の信念なのか。ともかくも、この講義の根本の目的を鮮やかに見せつけられて、ターナハースは思わずぐつと歯を噛みしめた。

「賄賂の具体的な手段は、後回しにしてください。他に有効な手段があるのなら、限られた時間はそちらに使いたいと思います」

タルスが、静かな眼差しのまま一呼吸の間、ターナハースの顔を見つめてきた。そしてまた、何事もなかったかのように、書類の山

とは別に書類ばさみから紙束を引き抜いた。

「……もつとも根本的な解決は、上水道の再整備です。この王都の規模に見合った現代的な上水道建設。それしか、この状況を完全には打破できないでしょう。治水局は、当然前向きではない。だが、王太子殿下は治水局の老いぼれが死に絶えるまで、そのくだらない既得権に配慮したりもなさらない」

「ええ、しそうにない方ですね」

思わず、相づちをうつてしまったが、誰も目に見える反応は示さなかったので、内心ほっとした。

「これは、極秘の資料です。治水局に洩れたら、数日のうちに主要責任者らが暗殺されるでしょう。ですが、幸いかどうかはわかりませんが、貴方はこれを見ることのできる立場にある。飲用水の問題の解決に、当座必要な情報ではないでしょう。ですが、事務処理に際しては、あらゆる背景の知識を仕入れるべきだと、冒頭にも申しました。……賄賂は後に回す、と。では、この情報はどうしますか」  
まるで、遊戯駒の詰めにかけられたようだ。そう感じて、ターナハースは口を引き結んだ。

長く、ここにいるつもりはないのだ。まだ始まってもないような上水道整備の情報を、しかも極秘の情報を受取って、いいことがあるはずがない。

重たい口を、ゆるゆると開いた。

「正直、今その情報を得ることの不利益しか、思い浮かびません。施療院の状況を少しでも良くしたいとは思いますが」

王太子殿下にお仕える気は、ないのです。

その言葉は、これまでの相手の反応を思い出すと、音にすることができなかった。

「情報を」

タルスが、珍しく言葉を切った。

ターナハースはつられて、顔を上げて彼の静かな面を見上げた。

「情報を得るということは、自由を得るということです。無知によ

る無駄と無理から逃れ、先を見通すことができるようになる。当然、貴方の目的を達成するための、力になります。……力にすることができます」

もし、王太子殿下から逃れたいのであれば、それにも力になるかもしれない。

そう囁かれた気がした。

凝然とタルスを見つめる間に、紙束がエスターへと渡された。

エスターはターナハースの顔を確認しながら受取っていたので、そこで少しでも顔を顰めたら、きつと拒否できただろう。

だが結局、講義が終わってタルスの前からエスターの前へと、書類の山がごっそり移動しきっても、山のかたわらに置かれた極秘資料はタルスの手元へ戻ることはなかった。

## 11 火の国王城（8）

講義が終わりタルスが辞去すると、飲み頃に冷えた花水が供され、書類の山は窓際の文机に移動された。筆記具も片付けられ、代わりにエスターが三着のドレスを持ってきて、部屋の様相は一変した。ふと気がついて見回せば、単なる応接室や客室ではなさそうだった。

布を使うところは青を、木を使ったところは深い茶色を基調とし、石はすべて細かな瑠璃が散りばめられた乳石のようだ。家具は柔らかな曲線を描くものが多く、さりげなく要所にあしらったレースや小振りの貴石には、居住者を女性に絞ったような印象を受ける。

「お好みのドレスの型がありますか？」

エスターの問いかけに素直にドレスを見比べたが、結局首を振った。

「ドレスを着たことはないの、特に好みは……」

「さようでございますか。では、これなど、締め付けも少なく慣れなくてもお楽かと思えます。お色を合わせてよろしいでしょうか？」

色を合わせる？と首を捻ったが、運ばれてきた姿見の前でドレスを首下に当てられて、ああ、髪や肌の色と相性を見ているのか、と得心した。

「失礼いたします」

ほっそりとした手で、頭の右側に固くまとめて編み込んでいた髪が解かれた。

「ドレスに合わせて、結い上げてもよろしいですか？」

この問い掛けには、困った表情になってしまった。できれば、首をまるつきり晒したくはないのだ。

優秀な侍女は、その声にならない言葉をすぐに察してくれた。

「かしこまりました。緩めに結い上げて、一部はこちらに垂らしておきましょう」

ドレスに着替えさせ、髪を整えて、薄い化粧を施すと、エスターは真剣な顔を改め、人好きのする笑顔で完成品を褒め上げた。

「やはり東の方は肌のお色が白くて、濃色が際立ちます。羨ましいですわ」

姿見に映る自分の姿に、ターナハースは珍しげに見入ったが、エスターの言葉は半分以下に割り引いた。

旅の日焼けは明らかだし、気慣れない服に自信がなさそうで、似合っていない。頬に薄く朱をのせてくれているのが、暗い表情を隠していて、そこはさすがと感心した。

「殿下がいらっしゃるまで、こちらで食前酒をお楽しみくださいませ」

さりげなく慣習を教えられ、控えの間らしき部屋に導かれた。

一人掛けのソファがいくつか置いてある小ぶりの部屋だ。エスターがかいがいしく渡してくれた酒は、多少甘味があるものの強い。

ジークフアランドの酒には、火の精が入っていると、よく言われる。勧められて、格子窓の外が見えるソファに腰を下ろした。

いつしか、日が暮れようとしている。紺色に染まった空の一角が強い赤に染まっていて、美しい。

だが、見慣れた淡い夕暮れとはあまりに違った。

（何故、こんなところにいるのだろう）

ずっと燦っていた焦りが、鋭く胸を刺した時、さっと入り口の垂れ幕が動いた。

何気なく入ってきた青年は、ターナハースに目を留めて、ぎくり、と、ターナハースの方が息を止めるほどに身を強張らせた。

「セ……イランさま」

つられてぎこちなくなりながらも、立ち上がって迎えると、セイランは一度の瞬きで表情を戻した。

「ターナハース殿。これは、見違えたな」



「村は、いかがでしたか」

社交辞令に応じる気も起こらず、つい不躰に尋ねると、黒い瞳が笑みの形に細められた。

だが、形だけだ。セイランは笑ってはいない。

それはわかったが、拘泥する気にもならなかった。

「これは失礼。先に話すべきだったのに、気がまわりませず、申し訳ありません」

冷たい声音で、それでも口調だけは丁寧に、セイランは謝罪した。  
「ゼーネという出産を控えた娘に会いましたよ。体調に変わったことはないということでした。正直に言えば、ほかの女医が貴方に代わることは拒否感があるようでしたが、これは諦めてもらうしかない。明日、女医と直接話してもらおう予定です」

眉根を寄せるターナハースから顔を背け、淡々と語ったセイランが、ふと鼻の頭にしわを寄せた。

「説得するような時間も機会ありませんでした。……貴方の名前を出してようやく、ゼーネと村長の家で会うことができた。それ以外の住民は皆、家の中に隠れてしまって。話が進まず、時間ばかり食いました」

思わず、大きな息をついてしまった。

セイランが片眉を跳ね上げて顔を見てきたが、今度はターナハースが顔を背けた。

村は、セイランを信用しなかったのだ。やはり、と思う。そしてそれでも、村の事情を自分の口から言ってしまうわけにはいかないのだ。

「せめて、せめてお産の時だけでも戻れないでしょうか。……必ず、またここ来ると約束をしても？」

ぽつりと呟くように問い掛けると、セイランの眉が戻り、表情が消えた。

「何を、そんなに拘るんです？ 出産だ。病気じゃない。初産の娘の不安を払拭するために、村を消炭にってしまうのは本末転倒でし

よう？　まして、まだ出産の気配もないようだ」

「それが、問題なのです」

ターナハースは勢いよくセイランを振り向き、驚いた青年の腕を掴むと、高い位置にある目を覗き込んだ。

「正常な出産であれば、自然の営みです。確かに病気ではない。けれど、正常でない出産だつてある。その場合は、命に関わります。そして、あの村は何故か、異常な出産が起こりやすい。その症状のひとつは、陣痛の弱さです。……ゼーネは産み月です。もちろん、個人差はあるでしょうが、前触れとなる陣痛もどきを感じてもいい時期です。これまでも、胎動が少ないのが気になっていました。今もまだそんな状況に変化がないのであれば」

そこまでまくし立てて、青年の戸惑いにやっと気がついた。未婚らしきセイランに、出産や妊婦に関する知識があるはずはない。

ターナハースは、一度、ぐつと言葉を飲み込んだ。

「……ゼーネを放ってきた、私の責任です。なんとしても、出産までに私は村に戻ります」

「ターナ、」

「セイランさまにも村にも、誰にも迷惑をおかけしないようにします」

渋い顔で名を呼んで諫めてくるのを、遮って言い切った。

ターナハースは、覚悟をきめた。

帰ると、決めた。

だからその是非についてはもう、議論の対象ではない。

「でも、少し時間がかかるでしょう。その間にゼーネや村を恐慌に陥らせたくはない。……医師の派遣は不要です。おそらく村は、受け入れないでしょう。でもその代わりに、私の意志をお伝えくださいますか。必ず戻ると言っている、と。王太子殿下の使者としてではなく、たとえば、私の友人が……身内だと名乗って……」

「何をもめてる？」

突然入室してきたリファラジークに、慌てて身を離れたのはセイ

ランの方だった。

「特に何も。彼女のいた村の報告をしたところ、いろいろと医療上の注意事項を伝言されていたんですが、理解が追いついてませんでした。……明日までに簡単に箇条書きにしていただけですか？」

平静な声だ。冷たく聞こえる。

最後の依頼になんとか首肯して応じたが、王太子は会話にはさして興味も示さず、ターナハースの全身を赤茶の視線で一瞥すると、無言で隣の食事の間へと移動した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7768n/>

---

睡蓮の糸

2011年6月7日21時55分発行